現代語訳

源氏物語

玉鬘

322315

日文 701480513

山田孝雄 校閲
谷崎潤一郎 新訳

源氏物語

大连外国语学院图书馆
藏书

巻五

中央公論社

新譯源氏物語普及版卷五奥附　昭和三十一年十月一日印刷　昭和三十一年十月五日發行

譯者谷崎潤一郎　校閲者山田孝雄　發行者栗本和夫東京都千代田區丸の内二の二　印刷者長久保慶一東京都新宿區市谷加賀町一の一二　發行所中央公論社東京都千代田區丸の内二丁目二番地丸の内ビルディング五九二區

定價二百五十圓

新譯源氏物語卷五目次

御法……一
幻……二五
雲隱……五三
匂宮……五七
紅梅……七五
竹河……九三
橋姫……一四一
椎本……一八三

新譯源氏物語卷五目次　二

總角……二七
早蕨……三三

插畫　中村貞以
山本丘人
橋本明治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

御法

御法

紫の上はいつぞや重くお患ひになりましてから、すつかり病身におなりになりまして、何處と云ふこともなく惱みつゞけていらつしやいますのが、久しいことになりました。さう重體と云ふのではありませぬが、長い年月の間のことですから、もう頼りなさゝうに、いよ〳〵弱々しさを增していらつしやいますので、院の御心配になりますことは此の上もありませぬ。暫くの間でも御自分が後にお殘りになりますことを、とても堪へ難いやうにお感じになるのでしたが、御病人おん自らのお心持としても、此の世の榮華は盡したし、絆になるやうなお子達もないおん身ですから、强ひて生きたい命ともお思ひになりませぬながら、年頃のおん契を餘所に先立つて行つたら、どんなに歎きをおかけ申すことになるであらうかと、そればかりが案ぜられ給うて、人知れぬお胸の内にも哀れを感じていらつしやいます。そして、後の世のためにとさま〴〵の佛事どもを執り行はせ給ひながらも、「矢張何とか

して出家の本意を遂げて、ちよつとでも取り留めてゐる命の間は、餘念なく勤行を勵みたく」と、始終おせがみになるのですけれども、どうしても許してお上げになりませぬ。それと云ふのが、男君とても思ひ立つていらつしやることなのですから、上がこれほど熱心に仰せになるなら、それをしほに、自分も催されて同じ道に入らうかともお考へになりますものゝ、しかし一度出家をなされば、假にも現世を顧みてはならないものと、覺悟しておいでになるからなのです。あの世では一つ蓮の座を分たうと互にお約束をなすつて、行末を賴みにしていらつしやる御夫婦仲なのですけれども、まだ此の世にゐて修行を勵んでおいでになる間は、同じ山であつても峰を隔てゝ、相逢ひ給ふことが出來ないやうなかけ離れた庵に住むべきものと、云ふ風にばかり考へておいでになりますのに、かう心細い有樣でお患ひになつていらつしやつては、いよ〳〵世を逃れて家を出て行かうと云ふ場合に、とても可哀さうで捨てにくゝ、却つて今以上に心が亂れて、折角淸い山水の住家が濁ることであらうと、躊躇つていらつしやいますので、たゞ淺はかに、何の造作もなく遁世をすると云ふやうなのから見れば、隨分立ちおくれておしまひになりさうなのです。女君は、お許しがないのに一存でお思ひ立ちになりますのも、體裁が惡く、不本意のやうでもありますので、此のことのためには殿を恨めしく思つていらつしやるのでした。一つには又御自分の身をも、罪障が深いせゐではないのかと、氣に病んでもおいでになるのでした。年頃內證の御願としてお書かせになりました法華經千部を、急いで供養なさいま

イ、鈴虫二七六頁頭注
ロ参照

ロ、一人は秋好中宮、一人は明石女御なるべし。明石女御立后のこと此處に始めて出づ

ハ、法華經第五卷を講ずる日に行ふ行道。「法華經をわが得しことは薪とり菜つみ水くみ仕へてぞ得し」〔拾遺集〕と云ふ行基菩薩の歌に聲明の節をつけて唱へるのを法華讃嘆と云ひ、薪を背負うてその讃嘆を唱へながら行道するのを薪の行道と云ふ

す。御自分の御殿としていらつしやる二條院でなさるのでした。七僧の法服など、身分々々に應じて下し置かれます。色合、仕立て方を始めとして、結構なことは云ひやうもありませぬ。大方何事もたいそう嚴かにおさせになりました。さう大袈裟なことのやうには申し上げられませなんだので、院は委しいことゞもは御存知なりませなんだのに、女の御指圖としては詣り深く、佛事のやうなことにさへ通じておいでになるお嗜みの程を、全く何處までもよく出來たお人よと感じ入り給うて、大體のおんしつらひや何かのことだけを、面倒を見てお上げになります。樂人、舞人などのことは、大將の君が取り分けてお世話申し上げられます。內裏、春宮、后宮たちを始め參らせて、六條院のおん方々も、御誦經、捧物などのやうなことだけは御寄進なさいますので、それだけでもお立派ですのに、ましてや今時、此の御準備の御用を勤めない者はありませぬので、いろ〳〵と物々しいことゞもがありました。全くいつの間にかう數々のお支度をなすつたのでせうか、隨分早くからの御願なのであらうと察せられます。花散里と申し上げるおん方、明石のおん方などもお渡りになりました。上は南東の戶を開けて、御自分の席においでになります。寢殿の西の塗籠なのでした。おん方々のお局どもは北の庇の方に、衝立だけを中仕切にしてしつらへてあります。三月の十日のことですから、花の盛りで、空のけしきなどもうら〳〵として風情に富み、佛の住んでおいでになる極樂世界の有樣も斯樣であらうかと思ひやられて、格別信心の深くない者でも、罪障が消滅するでもありませう。中日の日に薪の行道を

イ、前頁頭注ハ參照
ロ、匂宮。明石の上の孫に當る。此の頃五歳なるべし
ハ、今更惜しくもない私の身ではございますけれども、これを最後として薪が盡きるやうに消えて行くことを思ふと、悲しうございます。「たきゞ盡きなんこと」は、法華經序品に釋尊の入滅を「如二薪盡火滅一」と云つてあるのに據つた句
ニ、「薪こる思ひ」は「法華經をわが得しことは」の行基の歌（五頁頭注ハ參照）にもとづいた句で、法華經に奉仕すること。あなたが法華經に奉仕なさるのは今日がその第一日で、此の後長く現世に生きていらしつて

する間、大勢の僧どもの讃嘆の聲があたりを搖がしてゐたかと思ふと、やがてぱつたりと止んで、靜まり返る時の淋しさなど、しみ〴〵哀れにお感じになるのでしたが、まして近頃になりましては、何事につけても心細くばかりお思ひになります。明石のおん方へ、三宮をお使にして聞えられます。

惜しからぬ此の身ながらも限りとて
たきゞ盡きなんことの悲しさ

此のおん返りは、あまり心細さうに申し上げても、人に聞かれて氣が利かぬやうに思はれはせぬかと、わざと當り觸りなく詠んだのでせう。

薪こる思ひはけふをはじめにて
この世にねがふ法ぞはるけき

夜もすがら貴い勤行に合せて絶えず打ち鳴らす鼓の聲のおもしろさ。ほの〴〵と明けて行く朝ぼらけの、霞の隙から見える花の色々が、矢張春に心がとまるやうに匂ひ渡り、百千鳥の囀りますのも笛の音に劣らぬ感じがしまして、樂しみも哀しみもこゝに極まつたやうな時に、陵王の舞が終りに近づいて、調が急調になるあたりの音樂が、花々しく賑かに聞え出しますと、人達が皆脱いでは被けられるさま〴〵な衣の色合なども、折が折なのでたゞ風流とばかりに見えます。親王達や上達部の中でも、此の道に堪能な方々は技を盡して奏でられます。上も下も嬉しさうに興じ入つてゐる光景を御覽にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

お願ひになる法の道は、遠くいつまでも續くことでございませう。これは此の法事を主とする法華經提婆品に「于レ時奉事經」於千歳一」とある、千歳給侍の心を含ませて詠んだ歌で、「法の道が久遠につゞくやうに、あなたも此の世で千歳の御壽命をお保ちになりませう」と云ふこと

ホ、紫の上は昔から春の季節を好んだ人だからである

ヘ、此れが私が此の世で營む最後の法會で（もう直き死んで行く身で）はございますが、それでも此の法會の功德に依つて、生々世々あなたと廻り遇ふやうにとお約束したことは叶りますと、もうさう長くは生きられないと悟つていらつしやるお心のうちには、よろづの事が哀れに感ぜられ給ふのです。昨日いつになく起きておいでになりましたせゐか、今日はたいそうお疲れなされて横になつていらつしやいます。年頃かう云ふ催しの折毎に參り集つて樂を奏で給ふ人々のお顏、お姿、それ〴〵の才能、琴笛の音などを、いよ〳〵これが聽きをさめであらうとお思ひになりますと、今迄は左程氣をとめてもいらつしやらなかつた人達の顏にまで、自然しみ〴〵と御注意が向けられます。まして夏冬の折にふれたおん遊にも、おん戯れにも、内々多少の競爭心はお持ち合せになりつゝ、さすがに親しうしていらしつたおん方々に對しては尙更なのですが、どうせ誰方も長いことはない世の中ながら、先づ御自分が一番先に行くへも知れず消えてしまふのかとお思ひつゞけになりますと、云ひやうもなく悲しいのです。法會が濟んで、めい〳〵がお歸りにならうとなさいますのにも、何となく永久の別れが感ぜられて、名殘が惜しまれるのです。花ちる里のおん方に、

たえぬべき御法ながらぞ頼まるゝ
　世々にと結ぶ中のちぎりを

おん返し、

むすびおく契はたえじ大方の
　殘りすくなき御法なりとも

へられるものと、頼もしう存じてをります

ト、世間普通の、有難味の少い法會でも功德はあるのでございますものを、まして此のやうな立派な法會でお互の間に結んでおく御緣は、後々の世までも絶えることはございますまい。「殘りすくなき御法」は、あとに殘る功德の少い（あまり立派でない）法會のこと

イ、明石女御のこと、こゝにて始めて中宮と見ゆ

ロ、中宮の里下りの儀式

ハ、行啓があつて入御の後に供奉したる公卿たちが姓名を名のり申す儀

引きつゞいて、不斷の讀經、懺法など、有難い佛事の數々を怠りなくおさせになります。御修法はこれと云ふ驗も現はれずに月日が立つて行きますので、普通の行事のやうになつて、然るべき所々、寺寺で、ずつと勤めさせておいでになるのでした。

夏になりますと、例年の暑さにさへ氣をお失ひになるやうな折々が多いのです。何處と云つて取り立てゝお惱みになるのではありませぬが、たゞだん〳〵に衰弱していらつしやいますので、見てゐて氣の詰まるやうなお苦しみはないのです。侍ふ女房達も、此の先どうおなりになるであらうかと考へますと、先づ眼の前が暗くなるやうで、悲しく、勿體なく存じ上げます。そんなおん有樣でいらつしやいますので、中宮も此の二條院へお退りになります。東の對に御滯在なさいますので、寢殿の方でもお待ち申し上げていらつしやいます。おん儀式などはいつもと同じなのですけれども、若宮達のおん行末をお見屆けになれないでしまふことをお思ひになりますと、何かにつけて哀れは盡きませぬ。上達部などが大勢お供申し上げて、名對面などのおんことがありますのにも、あゝあれは誰、あれは誰と、つい一人々々に耳をとめてお聞きになります。久しい間御對面がなかつたのを珍しくお思ひになりまして、細々とおん物語をなさいます。院が這入つていらつしやいまして、「今夜は巢離れたやうな心地がして、とんと面白くありませぬ。彼方へ行つて休むことにしませう」と、御自分のお居間へお渡りになります。上が起きていらつしやいますのを、嬉しくお思ひになりましても、それがいつま

ニ、鳥が巣を離れること、こゝでは紫の上の側を追ひやられてひとりぼつちにされること

ホ、同じ院の内ながら中宮は東の對に、紫の上は寢殿にゐるのである

ヘ、これは紫の上の言葉なるべし

でつゞくことやら、全く果敢ないおん慰めなのです。「彼方の御殿にいらつしやいましては、お渡りを願ひますのも恐れ多うございますし、と云つて此方からお伺ひ致しますことも、今では出來にくうなりましたので」と云ふことなので、中宮も暫く寢殿の方においでになりますので、明石のおん方もお越しなされて、しんみりとした、趣深いおん物語の數々をお取り交しになります。上はお心の内ではいろ〳〵と考へていらつしやるのですけれども、偉さうに亡くなつた後のことなどを、仰せ出したりはなさいませぬ。たゞなべての世の無常なことを、おつとりと、言葉少なに、それでゐて淺はかではないやうに、仰せられるけはひなど、却つて口に出してから〳〵と仰せられるよりも哀れに、物心細さうな御氣色が著しく見えるのでした。宮たちを御覽になりましても、「皆さまのお行末を拜みたいと願つてをりましたのは、矢張その心持の中に、かうまで果敢ない身を惜しむ氣が交つてゐたのでございませうか」と仰せなされて、涙ぐみ給ふお顏の匂が、たとへやうもなくお美しいのです。なぜそんな風にばかりお考へになるのであらうと、中宮もお泣きになるのでした。不吉らしくなどは聞えないやうに、ふとした折のついでなどに、「長らく奉公をしてくれました人達の中で、これと云ふ寄るべのない、可哀さうな身の上なのが、誰と彼とをりますから、私がをりませぬやうになりましたら、どうかお眼をかけておやりなされて下さいまし」などゝだけ聞え上げられます。

中宮は、季の御讀經などを執り行はせ給ふので、御自分の常の御殿へお歸りになります。上は三宮が、

ト、二月と八月と春秋二季に衆僧を招いて大般若經を轉讀せしめる儀式

イロ、「内裏の上」は帝のこと、「宮」は中宮のことで、三宮はその間に出來た子である。紫の上は三宮の義理の祖母に當る譯であるが、原文に「はゝ」と書いてあるのは、「ばゝ」の意味か母と思つて呼んでゐるのか明かでない

ハ、吹き寄れば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな〔續古今集〕

數多のおん兄弟の宮たちの中でたいそう可愛らしくちよこ〳〵お歩きになりますのを、少し御氣分の宜しい隙には御自分の前にお据ゑ申されて、人の聞いてゐない折に、「私がをらなくなりましたら、思ひ出して下さいませうか」とお尋ねになりますと、「きつと戀しく思ふでせう。私は内裏の上よりも宮よりも母が一番好きなのです。いらつしやらないやうになつたら、機嫌が惡くなりますよ」と、眼のふちを擦つて紛らはしていらつしやるあどけなさに、ほゝゑみながら涙がこぼれます。「大人になりなされましたら、此處にお住みになつて、此の對の前の紅梅と櫻とを、花が咲く毎に心をとめてお眺めなされませ。然るべき折には佛にもお供へなされませ」と仰せになりますと、打ち頷いて、おん顏を見守つてをられましたが、涙が落ちて來さうなので、立つて行つておしまひになりました。此の三宮と女一宮とは、取り分け手鹽におかけなされて育てゝお上げになりましたので、おん行末を御覽になることが出來ませぬのを、口惜しく悲しくお思ひになるのでした。

やう〳〵秋の季節が來て、少し涼風が立ちましたので、おん心地もいさゝか爽かにおなりになつたやうですけれども、矢張ちよつとしたことにも故障が起り易いのです。まだ「身にしむばかり」にお感じになる秋風ではないのですけれども、ともすればお袖もしめりがちにお過しになります。もう中宮はお上りにならうとしていらつしやいますので、今暫くは御逗留をと、お引き留め申したくお思ひになりますけれども、それも出過ぎてゐるやうでもあり、内裏からは御催促のおん使が頻りなので、さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c